

# 日本自動車史の資料的研究 第17報 明治末期，全国周遊自動車旅行の記録（1910～1912）

大 須 賀 和 美

## 初 め に

近代文明の利器である自動車の出現は、勞せずしてより速く、より高く、より遠くへ移動したいという人間の長年の夢をかなえてくれる機器として、また、複数の人と荷物を同時に運べる利便さから、長距離旅行を魅力的に変えていった。

わが国へも今世紀初めに欧米人により自動車を持ち込まれると、冒険好きの彼等により、又は、一部の日本人により早速自動車旅行が試みられ、いろいろな話題が残されている。

しかし、当時の日本の道路事情は、およそ自動車旅行には適さないもので、かご、騎馬、徒歩が陸上交通手段であった江戸時代の名残りそのままに、道は狭くてこう配はきつく、山越えはけもの道に近いもの、人を運ぶ自動車を反対に人が運ばなくてはならぬ場合の方が多く、困難苦難の連続であったようだ。

ここに、明治44年（1911）の夏“全国周遊自動車旅行”と称し、東京銀座の“山口勝蔵商店”（自動車・航空機関係機械商）の店主一行が1か月近く旅行した記録が協賛同乗した国民、東京日日、東京朝日の各新聞記者により生の声として当時の新聞に残っており、また、通過した各府県の地方紙にも特記されていることから、これら記事を集録・整理し、一連の旅行記としてその苦勞を確認することとする。

この旅行に使用された自動車は、前年の明治43年4月末訪米の途中共日されたインドのパロダ王（BARODA）の使用車フィアット（FIAT, Italy）で、離日時に山口勝蔵が譲り受けた世界の名車である。当時インドの各州王の来日が相続いていたが、自動車を携えてこられたのはパロダ王のみで、東京滞在中国賓として待遇された。

また、山口が全国周遊旅行に出発直前、小手調べに歌舞伎俳優“市村羽左衛門”一行と同行した関西旅行があり、更にその翌年、羽左衛門一行による再度の関西、山陽道旅行も続いており、山口もまた同行していることから、次の4部に分けて報告する。

- 第1部 インド、パロダ王の来日旅行（明治43年5月）
- 第2部 市村羽左衛門一行第1回関西旅行（明治44年7月）
- 第3部 山口勝蔵全国周遊旅行（明治44年8月）
- 第4部 市村羽左衛門一行第2回関西・山陽道旅行（明治45年5月）

### 第1部 インド、パロダ王の来日旅行（明治43年）

4月26日 インド、パロダ王の随員9名ドイツ船ビューロー号にて長崎着。同行された王は香港にて在住印度人の歓迎会に出席のため下船され、28日次便で来日予定。自動車3台を揚陸、陸路東京まで走行予定で組立試運転中。

27日

28日 パロダ王、王妃、王女らイギリス船チャイナ号にて長崎着。午後茂木村まで自動車で試走するも、道路事情悪く予定を変更して再乗船、神戸へ向う。

29日 午後5時チャイナ号関門通過、午後9時神戸着、船内泊。

30日 午前中ミカド・ホテルへ先着のフィッシャ夫人を尋ね人力車で布引の滝など市内見物、正午横浜へ向け出航。

5月1日 昼12時半横浜着、オリエンタル・ホテル泊。夜伊勢左木町にて時代劇観劇。

2日 鎌倉遊覧、王妃疲労のためホテルに止まり、王・王女の一行6人午前9時自動車にてホテル発、雨のため途中から戻り汽車に変更11時半鎌倉着。人力車にて八幡宮・大仏を見学後電車で江の島へ、午後5時半藤沢発汽車で帰浜。

3日 午前中王のみ徒歩で市内見物。午後2時発汽車で王妃・王女とも箱根へ、3時半国府津着、貸切電車に乗り替え湯本へ、宮の下の富士屋ホテル泊。

4日 午前9時ホテル発、小湧谷・蘆の湯・箱根湖・大湧谷などを一日巡覧、夕方の汽車で帰浜。

5日 国府津発汽車で京都へ、自動車は貨車で別送。午後7時半京都着、都ホテル泊。

6日 馬車にて東西本願寺訪問、その他市内見物。

7日 宗主国イギリス皇帝エドワード七世殿下崩御の知らせあり。夜先斗座にて歌舞伎観劇、10時帰館。

8日 一行午前10時半ホテル発、二条駅から汽車で12時過ぎ亀岡着。同地から保津川を舟下りして嵯峨に上陸、腕車にて嵯峨・渡月橋等遊覧の午後5時半帰館、天気快晴。

9日 午前8時ホテル発、2両の自動車にて奈良着11時。春日神社・大仏殿など見学、奈良ホテル泊。

10日 雨のため王妃・王女らは自動車で午前10時ホテル発京都へ帰り、王のみ秘書官とガイドをつれて10時50分発汽車で大阪へ。正午湊町駅着、大阪城・造幣局見学、午後3時半梅田発汽車で京都へ帰る。

11日 午前9時ホテル発、王のみ京都御所・二条離宮・仏教大学・京都大学を見学、王妃・王女の一行は10時発市内見物。

12日 午前9時20分発汽車で名古屋へ向う予定を天候の回復から急ぎ変更、随員のみ汽車で先行させ、王一行は2両の自動車で午前8時ホテル発、琵琶湖畔で2時間遊覧、

後2時半鎌倉着。海浜院ホテルで昼食、4時半発雨の中を帰京、途中程土ヶ谷の富士紡績工場を見学。

30日 午後3時、日本画伯をホテルに招待、揮ごうを見学。王女の肖像画を献上7時ごろ退座。

31日 離日準備。夕方霞が関官邸にて小村外相の送別晩餐会に出席。

6月1日 午前10時半新橋発汽車で退京。横浜オリエンタル・ホテルで英国領事、神奈川県知事等の別れの午餐会、午後3時半自動車で波止場へ。サイベリア号でアメリカへ出帆。



写真一 1 印度全図  
大阪毎日新聞、明治43年2月2日

バロダ国は広さ8,570方哩、人口200万人余で、首都バロダ市はボンベイの北247哩に位置し人口約11万人、中央鉄道線に沿った全印度土人州中の富裕国であり、皇室に歴代伝わる宝物中、純金銀の大砲2門及びこれに附属する同様の弾薬車(各々280ポンド)が特に有名。大・中・小学校と教育も完備し、日本へも留学生を送っていた。

来日の一行は、国王サー・サヤージ・ゲークワール殿下(48歳)、マハラーニ妃殿下、王女(18歳)、秘書官アムベカ、レーシー・ニムラルカー両大尉、侍医メータ博士その他運転手、料理人、侍女たちの10数人であった。

このバロダ王の来日と行動を共にしたもう1台の自動車があった。これはアメリカのフィッシュャ夫人(Mrs. Clark Fisher)の一行で、自動車世界旅行の途中本年2月中旬印度を訪問、周遊中にバロダ王と親しくなったものと思われ、同じドイツ船ビューロ号で来日したが、夫を8年前鉄道事故でなくしたからとて汽車きらいで、一部で別行動をとっていた。

神奈川県茅ヶ崎で子供をひき、言葉が通じないまま群がる人々から逃げるように走り去り、両親から告訴されたため離日ができず、慌てた夫人は示談に持ち込み、やっとバロダ王一行と同じ船で離日した。大体の行程は次



写真一 2 バロダ国王宮と国王  
大阪毎日新聞、明治43年4月28日

- 関ヶ原を午後1時大垣を3時に通過、揖斐川の渡船で手間取り笠松着6時、名古屋着7時、名古屋ホテル泊。中仙道を走った初めての自動車でないかという。
- 13日 午前9時半、当地で開催中の“第10回関西府県聯合共進会”へ自動車で来場、午前中見学、午後王は名古屋離宮へ、王妃・王女は腕車で市内見物。
- 14日 自動車で伊勢神宮参拝の希望があったが、木曾・揖斐両川の河口部で自動車の渡船ができぬため中止、東京へ向う。第三師団から参謀本部地図の献上を受け、道路事情を研究するも多難な様子、王妃の反対もあり自動車をあきらめ汽車で。同行のフィッシュ夫人一行のみ自動車午前8時半ホテル発東上、雨の中王も自動車途中まで見送られてホテルへ引返す。午後1時半名古屋駅発急行で全員東京へ、自動車は貨車で別送。午後8時半新橋着、帝国ホテル泊。
- 15日 午前中自動車未着なため馬車で、帝室博物館、遊就館見学。午後から自動車市内見物。夕方英国大使館訪問あいさつ。
- 16日 午前中、赤十字病院、帝国大学など訪問、午後渋沢男爵と会談、夜は王と随員のみ浅草今戸町の大滝原蔵の別荘に宿泊、日本式生活を体験。
- 17日 政府はパロダ王を国賓とし、式部官稲葉子爵に接待員を仰せ付ける。午後1時東宮御所参候、午後2時半朝香宮殿下が帝国ホテルへ王を答礼訪問。
- 18日 午前9時上野発特別列車で一行は日光へ、午後2時着遊覧、金谷ホテル泊。
- 19日 午後4時日光発、午後9時上野着で帰京。
- 20日
- 21日 午後6時芝の紅葉館で、在日印度人会大隈会長の歓迎会に自動車出席。
- 22日 午前10時、大隈伯爵を答礼訪問、正午過ぎ帰館。午後6時から、高橋日銀総裁主催の晩餐会に出席、9時帰館。
- 23日 午前10時半、英国大使同伴で参内、天皇・皇后両陛下に拝謁、夜英国大使の晩餐会に出席。
- 24日 午前10時半発、自動車池上本門寺へ、午後3時帰館。4時半新橋発汽車で王女と共に横浜へ、印度商業会議所の晩餐会に出席、9時発汽車で帰京。
- 25日 午前9時ホテル発、自動車深川の岩崎別邸、小石川の後楽園見学。午後5時上野発汽車で王妃・王女と共に松島行。
- 26日 午前5時仙台着、乗り替えて塩釜着6時半。県の和船宮城丸に乗り移り汽船に引かせて松島着9時、遊覧後午後5時半松島発特別列車で帰京。
- 27日
- 28日 午前9時2台（1台は在日印度人会の案内車）の自動車一行6人熱海行、午後2時小田原着後軽便鉄道に乗り替え熱海着、樋口屋旅館泊。王妃・王女は同行せず。
- 29日 午前9時熱海発軽便鉄道で小田原へ、2台の自動車に乗り替え大雨の中で困難、午

のとおりである。

4月末日 ドイツ船ビューロ号で神戸着，ミカド・ホテル泊。パロダ王の西下を待つ。

5月6日 }  
    ) } パロダ王の京都着後合流，京都・奈良・名古屋と行動を共にする。  
13日 }

14日 雨中，午前8時名古屋を出発して東上，午前11時半豊橋通過，浜名湖渡船，大井川は増水で渡船できず，海岸に出て大廻り相良経由で静岡着午後11時半，駅前の大東館泊。

15日 富士川はんらんの知らせで待機。夫人は市内見物，運転手は汽車で横浜まで燃料を求めに行く。

16日 午前8時静岡発，増水で破損した富士川の橋を村人の助けでやっと通過できたのが午前11時，沼津・三島を経て田方郡軽井沢にて又もや橋が流出しており，仮橋のため重量のある自動車は渡れず，村人に補強を依頼するも夜となり，田ぼの中にテントを張り野宿。

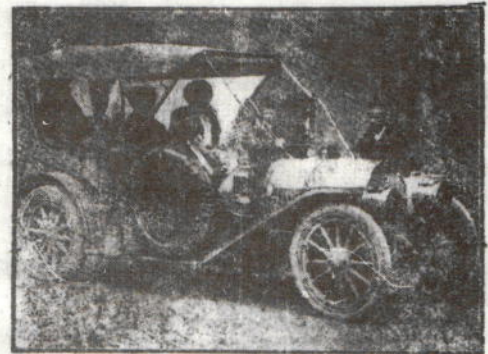
17日 警察に援助を依頼し午後3時半やっと通過，その後熱海岸越えから伊豆東海岸の難所も，多くの人夫の力で越し午後7時過ぎ熱海着，樋口屋旅館泊。

18日

19日 午前9時熱海発，人夫10人の力で泥道から脱出，小田原で12時，大磯で午後1時半，午後2時半茅ヶ崎にて疾走中子供をはね，そのまま去ったため警察で捜査中。外国婦人2人，男1人，日本人男1人と犬・猿が乗っていたとか。

20日 午後4時半横浜着，オリエンタル・ホテル泊。(注，前夜泊が不明，鎌倉へ立ち寄ったのではないか?)。

21日 通訳を汽車で先行させ東京でのホテルの手配。午後5時半横浜発，



写真一3 フィッシャー夫人一行と自動車  
国民新聞，明治43年5月17日



写真一4 フィッシャー夫人一行，軽井沢の露営。  
自動車の左がテント，その前の白服が夫人，  
サインはおいのブルックス氏  
国民新聞，明治43年5月22日

報知新聞記者が案内を兼ねて同乗、7時帝国ホテル着。

22日 自動車で市内見物。

23日

24日

25日 “ひき逃げ事件”として午後2時横浜検事局の取り調べを受け、父親と示談成立、オリエンタル・ホテルで会食して解決。

26日 } 自動車で日光遊覧に行ったのがこの間と思われるが、日時不明。道は大変良かつ  
27日 } たと。  
28日 }

29日 午後6時ごろ横浜入り、オリエンタル・ホテル泊。

30日 午後5時ごろ通関手続き完了、土産品買い。

31日

6月1日 バロダ王一行とともに横浜から離日、アメリカへ。

一行は、クラーク・フィッシャー夫人(52)、運転手で甥のブロック・フィッシャー、料理人のアルバート、下女のメリーと神戸でやとった通訳の日本人内田の4名に、小犬と印度で求めた一尺ばかりの猿であった。夫人はトロントで亡夫の経営していた大鉄工場を引き継いだ富豪で、7か月前アメリカを出発、商用を兼ねてヨーロッパ、印度を経て帰米途中の来日であった。

## 第2部 市村羽左衛門一行第1回関西旅行(明治44年)

歌舞伎の青年俳優“市村羽左衛門”は大の自動車狂で、明治44年夏山口勝蔵商店のリーガル(Regal, 25HP, USA)を小池三次郎運転手つきで借り、家族(女房お春、伴竹松、義弟市村亀三)と関西旅行を計画した。山口も全国周遊旅行の準備中のこととて、小手調べのため同行し、市村の家族一行は箱根越えが危険なため汽車で沼津へ先行、行程の概要は次のとおりであった。

7月11日 市村家一行4名、午前8時半東京発急行で沼津へ。自動車は午後3時東京発→子安→国府津(7時半)→小田原(8時半)から熱海へ向ったが、早川口にて増水のため橋が破損しており、渡船も危険でやむなく国府津へ引き返す。

12日 朝人車とも国府津から貨車で沼津へ、午後2時10分着、牛臥うしぶせの三島館にて市村一行を乗せて西下、富士川の橋は増水で破損しており、人夫をやとって修理を試みるも無理、やっと渡船で通過(10円もとられたとぼやく)、8時静岡着、大東館泊。

13日 午前7時静岡発、大井川の橋は増水で渡船はできず、下の矢口橋へ回るもこれも修理中、村民の助けでやっと仮橋を通過、海岸の横須賀街道から中泉に至り開延楼にて昼食。浜松の花屋で小休止、午後6時舞坂弁天島の花屋支店に臨時泊。

名古屋で宿泊予定の支那忠旅館では、昨夜から一行の到着を待って心配し、各所に照

会するも行方不明、豊橋を通過した様子もないと。

- 14日 朝弁天島発、浜名湖は人車とも渡船、塩見坂・二川を過ぎれば道は良く、正午名古屋着、<sup>なじみ</sup>馴染の香雲軒で一風呂と昼食、午後2時半発美濃路から京都へ向うも、途中雨となり山中で道に迷って難渋、夜半となってやっと米原着、駅前井筒屋旅館に臨時泊。
- 15日 朝米原発、午前10時京都着沢文にて小休止、午後0時半大阪着中之島の大阪ホテル泊。
- 16日 浪花座見物、雁次郎、梅幸一座と面会。
- 17日 大阪発京都沢文着午後1時。祇園祭見物。
- 18日 午前8時沢文発市内観光、都ホテルで昼食、嵯峨へ回り午後4時帰館。
- 19日 自動車は貨車で東京へ別送。一行も汽車で沼津へ。

### 第3部 山口勝蔵全国周遊旅行（明治44年）

山口勝蔵は先年来日したインドのパロダ王から譲り受けたイタリア製フィアット50馬力6人乗大型車を長距離旅行用に改造して“アサヒ号”と名付け、国民、東京日日、東京朝日の各新聞社の協賛を得て“全国周遊自動車旅行”に出発した。当初の出発予定日は7月22日（土）であったが、羽左衛門との先行旅行で富士、大井、天竜川の各橋が破損修理中なのを知り25日に延期したが、折悪しく台風が東海道を直撃しているときとなり、途中道路の破損、橋の流失、山崩れなどで予想外の難行となった。箱根越えは先行で熱海ルートが無理なのを知り、甲州街道を大月から鎌倉街道で御殿場、沼津へのルートをとった。

一行は山口勝蔵と小池運転手に協賛3新聞社記者らの6名（国民のみ2人）で、八王子まで先導1両、見送り2両の自動車が随行していった。携帯品の主なものは、タイヤ4本、チューブ10本、乾電池8本、チェーン・オイル2箱、モービル・オイル10罐、木綿縄200尺、ワイヤ・ロープ100尺、4分板2枚、アセチレン用カーバイト、3トン・ジャッキ1台、工具類一式、大工道具一式等々に個人身廻り品4・5貫目平均とかで、総重量500貫ぐらい。

旅程の概要は次のとおりだが、出発直後から台風による電信不通や、難行による疲労からか同乗記者からの送信もと絶え勝ちで、通過府県の地元新聞記事とも合せて確認した。

7月25日 午前9時半、銀座の山口商店前を出発、協賛3新聞社をあいさつ廻り、二重橋にて皇居遙拝、日比谷公園に集結して群衆の見送りを受け、午前11時一路甲州路へ。早や曇り空から雨となり府中の手前で右後輪がオーバー・ヒートで発煙、ブレーキの締め過ぎによるか、雨中で修理して八王子に着いたのは午後3時半、料亭万杯にてやっと昼食をとり、見送りの3台の自動車を帰しいざ出発となったがまた大雨。とてもこれから山中の走行は危険とて、翌朝早立ちとして角木旅館泊。

26日 午前6時半出発、小仏峠にて山崩れに逢ひ、車輪は泥中に没して立往生、村中の壮丁20余名の助けを得てやっと脱出、その後の道も暴風雨にて破損がひどく、大月を経

て吉田口へ着いたのが夕方、人夫6人を雇い暗い中を籠坂峠を越えて須走り着、更に沼津を目指して進むも又もや山崩れで立往生、村民50人余の助けでロップを着けて須走りへ引き戻したのが夜中の12時、一行食事もとらずへとへと、米山旅館泊、記者連本社に打電できず。

- 27日 午前9時須走り発、昨夜と同じ道で車輪泥中に没し、積荷を全部下し村民総出でロップを引きやっとなら上りつめたのは午前11時、下り道はことなく雨中をひた走り、御殿場に出て沼津着午後1時、牛臥の三島館にとり留中の市村羽左衛門を尋ねて会食。午後2時発で富士川にかかるると連日の雨で大增水、橋は壊れたままで渡船もできず、やむなく富士駅から人は車に乗ったまま貨車輸送、江尻着6時半で静岡に入り地元歓迎会に臨み、8時大東館泊。
- 28日 前日の事故でラジエータを破損、修理に手間取り出発準備ができたのは午前11時半。過日の暴風雨のため安部、大井、天竜川の橋は破壊か流失、浜名湖の渡船や小夜の中山は難関、とてもここ数日間は自動車は通れそうもないとの情報で、静岡から人車とも汽車輸送で豊橋まで、午後5時半豊橋発、6時半赤坂、7時過ぎ岡崎へ入る。9時前に熱田、名古屋駅前支那忠旅館着9時半。
- 29日 雨の中の出発、午前9時名古屋発、11時20分笠松で木曾川橋を渡り、長良川は渡船で手間取り12時半、大垣で小休止して彦根着午後3時。日野川の橋畔で持参の昼食をとり出発、4時過ぎ草津を過ぎ5時15分瀬田の唐橋を渡るころ夕立はげし。京都に入り沢文旅館着6時半。東京出発以来319哩6鎖走行。(注)1哩<sup>マイル</sup>=80鎖(chain), 1鎖=22ヤード。
- 30日 雨の日曜日、午前中旅館で費し午後2時半出発、雨の中市内見物、渡月橋で小休止して4時半奈良に向う。木津川堤防を走り木津町を6時半通過7時奈良着。菊水旅館泊。
- 31日 午前9時奈良発和歌山に向う。途中山中二丈余の断崖道で脱輪すること2回、周囲に助けの人影なく荷物を下して一行6人でやっとなら上げ命懸け、午後2時過ぎ二見を通過、6時50分紀ノ川岩出の渡船場に到着、雨は降り川は大増水で渡船は大変困難、対岸の青年会の有志が舟で助けにきてくれ、3艘の舟をつなぎ沈みそうになるのをやっとなら渡したのが9時40分、10時に和歌山に入り、和歌浦の芦辺屋旅館に着いたのは11時半。宵の口から歓迎の席を設けて待っていた地元関係者は散会したあと、やっとなら夕食にありついたのは午前1時。
- 8月1日 昨日の難行で一行6人ともくたくた、加へて冷えから下痢症で終日旅館で休養。
- 2日 午前8時半発で大阪へ向う。紀ノ川口の田井の渡船か、北島の橋を渡って1里ばかりの孝子峠の峻坂越えしか道がなく、病後の一行にはその勇氣はなく、和歌山から佐野まで人車とも貨車輸送。佐野から岸和田・浜寺を過ぎ湊町近くでラジエータからの



漏水激しくオーバ・ヒート，応急修理して午後2時10分堺町に入り，住吉公園で小休止，午後4時中ノ島の花屋旅館着。

3日 自動車の各所修理と一行の休養のため大阪滞在。

4日 午後2時50分花屋旅館発西下す。西ノ宮あたりの狭い道を苦心して通り抜け，御影を過ぎた辺りで5時20分，エンジンが再度オーバ・ヒートで焦げ臭い，一行下車して応急修理す。三の宮から神戸を経て舞子の万亀楼に着したのは6時40分。

5日 オイル欠乏から早朝小池運転手は汽車で神戸まで買いに行くもなく，大阪にてモバイル・オイル4罐，インナ・チューブ2本などを入手して帰る。ために出発が大変遅れ，午後8時半舞子発，夜半12時姫路着，菊水旅館泊。

6日 午前9時姫路発，11時船坂峠を越えて岡山県に入り，午後2時半岡山着，後楽園を遊覧後自由舎泊。日のある内に宿に入ったのは東京発以来今日が初めて。

7日 折角岡山まで来たので讃岐の金比羅さまをお参りしようということとなったが，瀬戸内海の連絡船は自動車は渡せないとのこと，汽車で行くことになった。午前11時岡山発汽車で宇野へ，午後0時半の連絡船で高松へ，1時半高松発で琴平へ向う。4時琴平着参拝後高松に帰り，栗林公園遊覧後更に歩を屋島に伸し山頂着夜中の12時，全員くたくたの強行軍，可祝旅館泊。

8日 朝高松発，正午に岡山へ帰着。早速自動車以西下するも約10里で高梁川の河口，橋は落ち川原は数十町の大砂地で渡船もできず，附近に停車場もないことから岡山へ引き返し，午後9時20分岡山発の貨物列車で自動車のみ尾道へ先送り，岡山泊。

9日 一行は早朝6時の汽車で尾道着9時10分。再び自動車で三原を10時に過ぎて約4哩，道路が過日の出水で90間ほど崩壊したままで回り路は狭い土橋，やむなく三原まで引き返し，人と車は別々で再度汽車で西条まで，一行は午後5時20分先着。これから広島までは20哩。一気に

**襲名廣告**

今般先代勝藏名儀を襲名し益々業務を擴張致し誠實營業仕候間何卒倍舊御引立被成下度此段謹告仕候也

五月 山口 勝藏

工部局直輸入商 山口 勝藏

東京市京橋區本町二丁目十五番地 電話新野八八八九  
電話新野八八九九  
電話新野八九〇〇

写真一五 山口勝藏襲名廣告 明治43年5月9日，国民新聞

何ハ 流行、目下 行、新、自、動、車、各、國、最、新、自、動、車、販、賣、附、修、繕、部

自、動、車、貯、藏、附、屬、品、一、式、直、輸、入、商

山口勝藏商店 自動車部

東京市京橋區本町二丁目

写真一六 山口勝藏商店廣告，明治44年4月5日，時事新報

- と自動車を待つ一行に駅長らは前途の八本松峠附近に道路崩壊あり、せめて瀬野までは汽車で行くが便ならんと。一行再び後着の自動車と共に無がい貨車で瀬野まで、5か所のトンネルありその中の暑いこと、6時5分瀬野着。一路広島へ道は良し、大手町の長沼旅館着7時半。岡山以西山陽道の悪路は意外であった。東京発以来689哩9鎖。
- 10日 午後1時半旅館発市内見物、2時20分広島発宮島行。道はよし3時半岩惣旅館着。巖島神社参拝。東京朝日の記者は帰京することとなり別杯をくむ、道路険悪で行程が意外に捗らないためと言うが、体力的にも限界であったらう。
- 11日 午前10時半宮島を出発正午岩国に入る。錦帯橋は太鼓形の橋5つあり、車に綱をつけ百余名の小学生徒の力をかりて20分余で無事通過、自動車では初めてだと。岩国を過ぎすぐに賽の峠にかかる。坂は急で長く一気には上らず、山中で人影なく3人で押せど引けど戻るばかり、折から子供20人余が来合せ、力をかりてやっと引き上げた。次の中峠は更に急坂、こう配は九段坂の2倍ぐらいで7、8町あり、馬力、人夫など10人を雇い馬2頭を掛け2時間余りかかった。次の金明寺峠も人夫の協力で引き上げたが下りは急で車が逆立ちしたようだった。7時に中山峠にかかるころ日は暮れ、呼坂峠は村民の協力で上った。勝馬村では崖崩れに逢い、1町ほど砂利山を崩してやっと通過、平地に出たときは全員半死の体で、夜中11時半徳島着。
- 12日 午前9時徳島発、防府町の手前で道路工事あり、う回して三田尻へ出ようとしたが路肩崩れ田ぼの中へ脱輪、土方作業と猛暑で全員日射病、昼食を兼ね2時間休けい、午後2時山口へ寄るのをやめて佐野を経て小郡へ向う。午後5時山中峠を越えてから道は良し。午後7時馬関に入り春帆楼泊。東京発以来1,100哩。
- 13日 下関滞在。記者団は解散してここから帰京、自動車は関門を越え福岡まで行き、引き返して山口から山陰道へ入る予定。
- 14日 午後2時、記者団を送って下関駅へ。ここで記念に写した写真が「要塞地帯法」に触れ、憲兵隊の取り調べを受けるも懲罰は許された様子。
- 15日 九州へ渡るのはやめて午前11時半発、小郡から山口へ向う。今朝から暴風雨となり途中困難を極め、午後2時半山口着、上田旅館泊。
- 16日 午前10時案内者を乗せ出発、雨の中11時半津和野着。午後1時半発浜田までの30哩は下り坂、エンジンを止めて隋力で逆落し、雨が顔に突き刺り2時半浜田着。大森町を通り浅山にて夕食、今市から高松を経て杵築町出雲大社前因幡旅館着9時半。山口・島根の国道は日本一良い。
- 17日 出雲発松江にて電気ホーン故障、地元石橋鉄工所に修理を依頼するも分解を要し明日まで掛るとのことで、皆美旅館泊。
- 18日 車の修理待ちで松江滞在。
- 19日 午前8時雨中松江発、由良から阿古木の間2か所小橋が修繕中で渡れず、村民の助

けで仮橋を作り通過。夕刻鳥取に入り米善旅館泊。

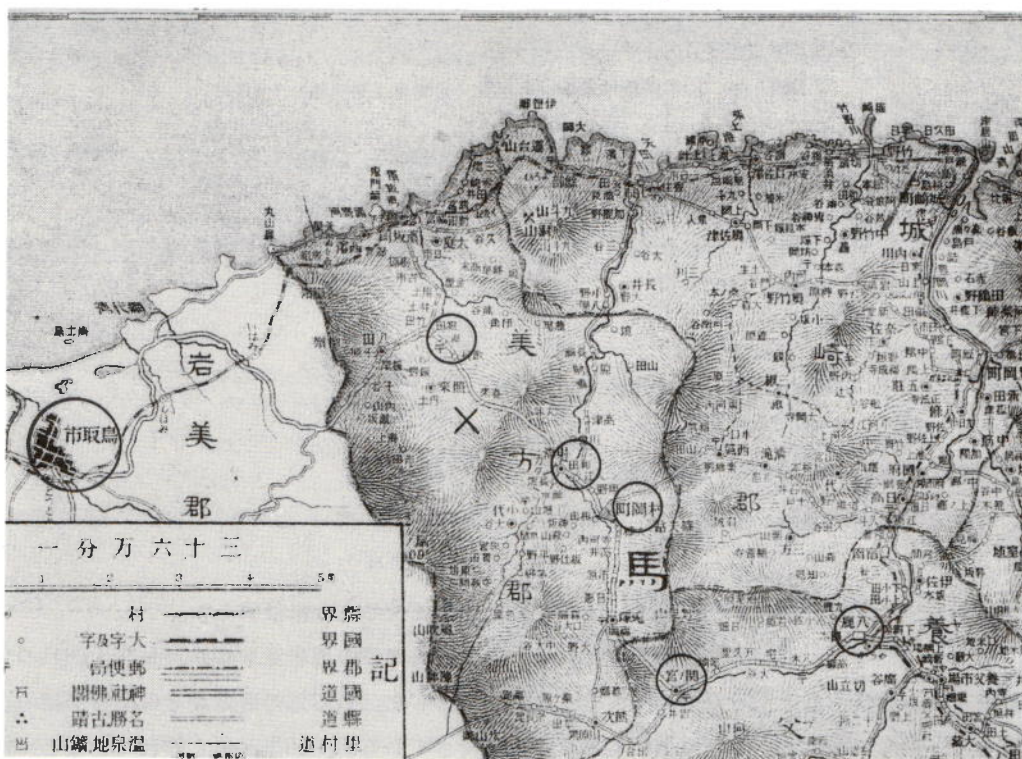
20日 午前8時発、豊岡を経て宮津に向う。蒲生峠をやっと越え11時湯村に入り、三間余の橋が修繕中で仮橋を作って渡り春木峠にかかる。道狭く曲角多くして進退窮まり、軟弱な路肩が崩れて車は後部から崖下へ滑り落ち、岩角に激突して大破、小池運転手は右腕を負傷し他の乗員は下車して無事。綿縄を松の木に結えて車を下まで引き下すも、タイヤは碎け、シャフトは折れ、ガソリン・タンクは破れ走行不能となったがエンジンは無事。警察の助けて人夫を雇い、車を引き上げて湯村まで運ぶ、午後7時半。周遊はここで中止と事情を東京へ打電、湯村泊。

21日 湯村から浜坂に出て汽船で城崎へ運ぼうと考えたが、浜坂では船の接岸が悪いとのこと。兵庫県土木部技師の協力で、35哩離れた但幡線の八鹿停車場<sup>ようか</sup>まで運ぶ準備をする。(写真一7参照)

22日 50人の人夫と2匹の馬に車を引かせ、夏草の茂る山道を牛歩のごとく和田、村岡へと進む。自動車の後押しとは、何と間の悪いことか、村岡泊。

23日 引継ぎ関の宮を経て八鹿へ、八鹿泊。

24日 自動車は貨車で大阪へ、一行も汽車で姫路を経て大阪へ、大阪泊。



写真一7 事故現場地図(明治41年版古地図に加筆)

×印 事故現場；○印 関係地名

山口勝蔵氏の東京—山陽—山陰ドライブ行程

第五節  
自動車の利用普及

月日	ドライブ行程、宿泊所
第1日 7.26	日比谷—宮城野—新—沼—八王子—角喜旅館
第2日 7.26	八王子—小仏峠—上野原—大月—沼坂峠— —須走口—米山館
第3日 7.27	須走口—沼津—富士川—静岡—大東館
第4日 7.28	静岡—安倍川—宇津谷峠—藤枝—島田— —大井川—金谷—焼津—袋井—見附— —中泉—天龍川—浜松—舞坂—弁天島— —殿名—豊橋—岡原—岡崎—大府— —熱田—名古屋 志那弘本店
第6日 7.29	名古屋—徳島—木曾川—松島—長良川— —和歌川—大垣—関ヶ原—瀬田—京 國語文
第6日 7.30	京都滞在—沢文
第7日 7.31	京都—奈良 卯水旅館
第8日 8.1	奈良—肥前川—和歌川 あしべや旅館
第9日 8.2	和歌川 滞在
第10日 8.3	和歌川—和歌山—大阪 花屋旅館
第11日 8.4	大阪 滞在
第12日 8.5	大阪—神戸—須磨—明石—粟子沢— —姫路 卯水旅館
第13日 8.6	姫路—岡山—山 自由寺
第14日 8.7	岡山 自動車修め置き、連絡所で高松金比羅へ —高松—金比羅
第15日 8.8	岡山—三原—広島 長沼旅館

月日	ドライブ行程、宿泊所
第18日 8.9	広島—宮島—岩国 白井旅館 ↑ ↓ —麻高
第17日 8.10	岩国—勝山 松政本店
第18日 8.11	勝山—三田尻—長府—下関 尊帆楼
第19日 8.12	下関 滞在
第20日 8.13	下関 滞在
第21日 8.14	下関 滞在
第22日 8.15	下関—山口 上田旅館
第23日 8.16	山口—神野—萩—田—石見 山城旅館
第24日 8.17	岩見—出雲大社 四輪屋
第25日 8.18	出雲大社—松江 皆英館
第28日 8.19	松江—安来—豊前 船坂—鳥取 本繁 旅館
第27日 8.20	鳥取—備前 村岡町(兵庫県)かもじや旅館
第28日 8.21	村岡町—久谷—備—八鹿 山根荘八家 (注) 以上でドライブ終る。
第28日 8.22	八鹿—大塚 道頓堀泊
第30日 8.23	大塚 滞在
第31日 8.24	大塚 滞在
第32日 8.25	大塚—新橋

(注) 1. 同ドライブ日数は滞在を含めて28日、全旅程日数は32日。  
2. ドライブ通過府県は東京府、神奈川県、山梨県、静岡県、愛知県、岐阜県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、岡山県、広島県、山口県、島根県、鳥取県を経て、再び兵庫県にはいて終わり15府県にまたがる。

写真—8 山口勝蔵周遊旅行行程表(自動車工業史稿—1から)

25日 } 自動車を神戸の川崎造船所で修繕して東京へ乗って帰ろうと思ったが、  
26日 } 大阪泊 日数がかかるとのことで、大阪に留め置く。  
27日 午後9時、一行は新橋着、直ちに迎えの新聞社の自動車で出発点の日比谷公園へ行き、解散式挙行。

一行6名の氏名は、次のとおりである。

山口勝蔵、小池三次郎運転手

国民新聞記者 太田茂、国民新聞写真師 松下長平

東京日日新聞記者 吉田禎治、東京朝日新聞記者 薄井秀一

1か月にわたる自動車旅行のあと、山口勝蔵は東京で次のように反省した。

日本の道路はまだ自動車旅行に適当しく、元来荷馬車位の田舎道を幅六尺長さ十四尺の大自動車で乗り廻はそうとするのは、そもそもの失敗であった。致る処の府県がその維持修繕の念に乏しく、県庁の附近3、4里は道幅もあり修繕もできているが、10里20里と離れたところになると丸で壊れ次第造り放しと言う処が多い。

また小池運転手は、私の苦心はただ行く先の道のことばかりで、橋はないか、渡船はないか、峠はないかと、日本開国以来の長途自動車旅行の運転手として険悪な道をあそこまで行けたのは自分ながら不思議で光榮に思っていますと語っている。

#### 第4部 市村羽左衛門一行第2回関西・山陽道旅行（明治45年）

自動車狂羽左衛門は、明治45年2月待望の自用自動車（中古車）を山口勝蔵商店から購入、早速家族連れで再度の関西旅行、更に下関までを計画した。車は2台で山口も小池運転手とともに同伴し、前年の周遊旅行の経験を生かす場となった。資料は断片的であるが次のとおりである。

〔一行の顔触れと自動車〕

リーガル (Regal, USA), 6名	グリゴアール (Gregoire, France), 4名
市村羽左衛門	銀座上方屋主人 (写真師)
同 妻女, はる	市村亀蔵妻女, とみ
同 義弟, 市村亀蔵	羽左衛門の母
山口勝蔵	岡田常吉運転手
小池三次郎運転手	
老妓, 来吉 (京都から同乗)	

5月6日 自動車を東京から沼津の牛臥の別荘へ汽車で回送。

11日 午前9時沼津を2台の自動車で出発、富士川の橋は増水で破壊しており仕方なく渡船。午後1時静岡大東館着中食、2時出発→豊橋泊。

12日 午前7時半雨の中豊橋出発、岡崎の西で橋を工事中で手間取り午前10時半名古屋駅前支那忠旅館着、中食予定が附近の火事騒ぎで11時早々出発→増水した長良川の渡船で1台が河中にすべり落ちて難渋、大垣廓町玉屋臨時泊。

13日 午前7時半大垣発→京都着午後1時半、一行9人沢文泊。

14日 京都滞在。

15日 午前10時発、ここから老妓来吉同乗、午後1時大阪ホテル着中食、2台の自動車です市内見物後夕方出発、舞子泊予定。

16日

17日

18日 夕方2台の自動車広島着、一行10人中沼旅館泊。

19日 朝出発西下。

20日

21日 夜自動車の一行下関着、春帆楼泊。一台は悪道路で破損、走行不能で前途中止。

22日

23日 午後2時京都着汽車で帰着、老妓来吉自動車旅行の楽しさを語る。羽左衛門一行は

午後8時10分発急行で沼津へ。

一行の顔触れと山口勝蔵が同伴していることから、前年の周遊と同じく17日には讃岐の金比羅参り、19日には巖島神社参拝をしていると思われ、さもないと、広島、下関へはもっと早く着くはずである。また、4人の女性が入っていることから、困難な山越えは避け、前回苦労した三原～広島、岩国～徳山間などでは貨車輸送であったと思うが、資料不足で確認はできていない。

## 考 察

山口勝蔵一行の周遊旅行については、先史「日本自動車工業史稿(1)」(昭和40年11月11日、自動車工業会発行)に後年ある雑誌に掲載されたという紀行文が、200枚余の写真とともに転載されているが、日々の足取りを追った本研究と照合すると、次の諸点に相違のあることが分る。これは山口の旅行日誌から紀行文や行程表を作製したとき、空白を想像で埋めたためのミスかと考える。

〔紀行文、行程表と本研究との相違点〕(写真一8、行程表参照)

- (1) 7月27日、貨車渡しで富士川→静岡は、富士→江尻。
- (2) 7月28日、静岡から名古屋まで走行したようになっているが、静岡～豊橋間は貨車輸送。
- (3) 7月30日、京都滞在となっているが、この日は奈良に出発しており、以後8月5日まで日付が行程より1日先行している。
- (4) 8月3日(実は2日)、和歌浦から大阪まで走行したようになっているが、和歌山～佐野間は貨車輸送。
- (5) 8月5日、大阪から姫路まで走行したようになっているが、これは実4・5日の2日分の行程で、4日は途中舞子に宿泊している。従って、日付の先行はここで解消する。
- (6) 8月8日、岡山から広島までとなっているが、8日は途中から引返して再度岡山泊となったので、実9日の行程であり、以後12日まで日付が1日遅れている。岡山～尾道、三原～瀬野間は貨車輸送である。
- (7) 8月9日・10日、2日間で広島～徳島間の走行は、実10・11日のことで、途中岩国泊は宮島泊である。
- (8) 8月11日、日付の後れから下関着は実12日である。
- (9) 8月12・13・14日、下関滞在が3日間になっているが、実12日は走行中で該当せず2日間が正しく、日付の後れはこれで解消する。
- (10) 8月16・17・18日、山口から松江まで3日間の走行は、16日の岩見銀山泊は出雲泊、翌17日は松江に到着しており、18日は終日松江滞在である。
- (11) 8月20日、鳥取から村岡までは、途中事故で周遊を中止し、湯村に戻って対策のため2泊しているので、以後日付が2日先行している。

(12) 8月25日、新橋帰着は実27日のことで、東京出発以来第34日目に当る。

次いで市村羽左衛門の関西旅行についても、前記“史稿(1)”(125・126ページ)に簡単に説明されているが、第1回が“明治43年、東京—下関間”となっているのは、“明治44年、東京—大阪間”が正しく、また、明治45年の第2回は下関まで行っていないと述べているが、事実下関へ到着している点を確認したい。

明治末期最新の自動車をもって、初めて日本国内の旅行を企てた冒険的外国人たちを最も悩ませたのは、東京・京都を結ぶメイン・ルートの東海道で、箱根山と大井川の2か処であった。

(1) 箱根山越え。これは次の4ルートでちょう戦された。(写真-9参照)

- ①小田原—熱海—熱海峠—軽井沢峠—<sup>かんなん</sup>函南—<sup>だいば</sup>大場—三島—沼津
- ②(甲州街道)大月—吉田—山中湖—<sup>かごきか</sup>箆坂峠—須走—御殿場—佐野—沼津
- ③小田原—湯本—宮の下—箱根峠—三島—沼津(東海道ルート)
- ④小田原—湯本—宮の下—仙石原—長尾峠—御殿場—佐野—沼津

明治41年5月、横浜から敦賀へ走ったニューヨーク・パリ間自動車レースの2台、フランスのドディオ車とイタリアのズスト車は①のルート。

(本学論叢No.13, 本研究第8報参照)

明治43年5月、フィッシャー夫人一行も①のルートで東上。(本稿参照)。

明治44年5月、東京・大阪間の往復自動車旅行を横浜グランド・ホテルのE・M・F車で試みた自動車・飛行機研究者小林吉次郎は、往きは②のルート、帰りは①のルート。

明治44年6月、アメリカ・ハップモビル(Hupmobile)社の宣伝隊一行は、代理店東京自動車の小栗常太郎とともに②のルートで神戸まで、途中富士登山を試み失敗。

明治44年7月、市村羽左衛門の第1回関西旅行のリーガル車沼津回送は①のルートで果せず、国府津から貨車輸送。(本稿参照)

明治44年7月、山口勝蔵一行の全国周遊旅行は、フィアット車で②のルートで西下。(本稿参照)

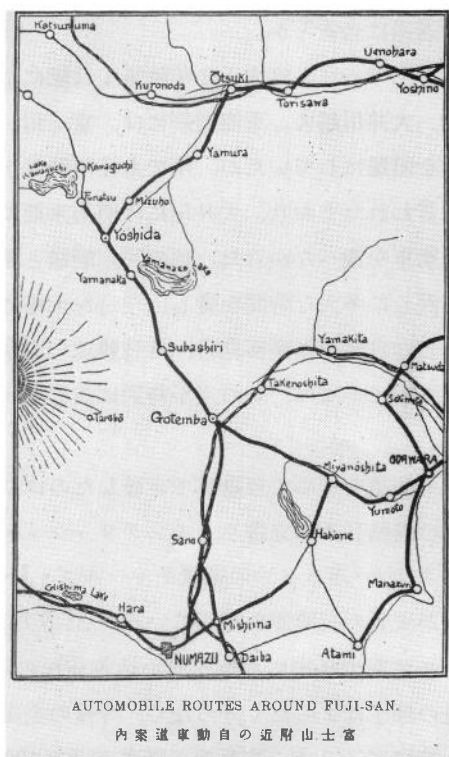


写真-9 月刊雑誌「自動車, JIDOSHA」大正2年7月号

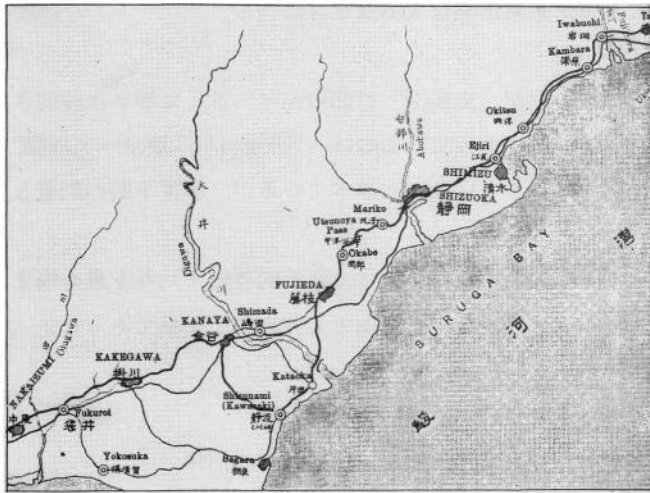


写真-10 月刊雑誌「自動車, JIDOSHA」  
大正2年7月号

Miles from Kobe	Between Towns	REMARKS
292	13	<p>The Tokaido is rejoined again 4 miles further on by quite a good road near Fujiwara.</p> <p>Note—It should be noted carefully that there is no bridge at all over the Oigawa on the Tokaido at Kanaya, and such boats as are available are far too small for ferrying a motor-car. While the road from Kanaya to Shizunami referred to above is quite good, it may interest those who would avoid the hard work of crossing the Kanaya Pass to know that there are several alternatives. The Tokaido may be left at either Nakasumi, Fukuroi, or Kakegawa, from all of which places there are roads connecting with the Tokusaka-Sagara-Kaido and by which the pass may be avoided. Of these roads that from Fukuroi is stated to be the best, and that from Kakegawa the worst.</p> <p>In addition to the bridge described above, there is another one known locally as the Yaguchi-bashi, which is two or three miles further up-stream, consequently nearer to Kanaya. It is apparently reached from Kanaya by a narrow winding road, and also from Shizunami by branching off to the left 3 miles further on at Kataoka. If this bridge be taken the Tokaido is rejoined at Shimada. It is reported not to be as strong as the other, but might serve as an alternative if necessary.</p>

写真-11 月刊雑誌「自動車, JIDOSHA」  
大正2年7月号

③の東海道ルートは、大正元年11月、アメリカ・スチュードベーカー (Studebaker) 社の日本代理人中村嘉寿と米人ラフフィン (John E Laffin) の一行が、九州地方への宣伝旅行の帰路、フランダース (Flanders) 車で試み、10人余の人夫の力で三島側から押し上げ、このときが3台目の通過に当たるとか。

④のルートは大正2年陸軍工兵隊により長尾峠が開さくされ、以後最良のルートとなった。

(2) 大井川越え。東海道筋には、富士川、大井川、安部川、天竜川の4大河川があり、自動車旅行を困難にしていたが、中でも江戸時代から“箱根八里は馬でも越すが、越すに越せない大井川”と言われたとおり、大井川には明治末期になっても島田・金谷の間に橋がなく、渡船も小さくて自動車を搬べなかった。他の河川同様と渡船に頼り差し掛った自動車は、地理不案内な中でう回路探しに多大な時間を費し、予定を大幅に狂わせた。

日本自動車倶楽部発行、月刊雑誌「自動車, JIDOSHA」の大正2年7月号に掲載されたドライブ・ガイドには、この点が特別に注意されている。(写真-10, 11参照)

東海道を初めて自動車で走破したのは、現在の資料では明治39年(1906)5月、世界自動車旅行の帰路日本に立寄り、イングリッシュ・ナピア (English Napier) 車で横浜から神戸へ向ったアメリカ・ボストンの富豪チャールズ・J・グリッデン夫妻と思われるが、4月26日付大阪時事新報が夫妻の長崎着を報じているのと、5月10日付静岡民友新聞が——5日静岡泊、6日天竜川の西岸の河原で砂地に車輪を食い込み住民の助けで脱出、同夜浜松泊——を報じているのみで、前後の様子はまったく分らなく、今後の発掘に期待したい。

彼はアメリカの自動車長距離競争に1905年から賞杯を提供していた自動車の大ファンで、グリッデン・カップ・レース (Glidden Cup Race) として世界的に有名である。



後 書 き

本稿以後大正2・3年にかけて「日本自動車倶楽部」の名のもとに、在日欧米人により日本全国（北海道、四国を除く）主要国道は自動車にて走破され、詳細な旅行記及びドライブ・マップが作製されて月刊雑誌「自動車、JIDOSHA」に英文で発表、訪日モータリストたちの便が計られていたが、日本人自身が利用するには残念ながら程遠いことであった。

本稿記載の各自動車旅行記には、当時の新聞に参考写真が多く記載されており、国立国会図書館に依頼してマイクロフィルム取りして複写拡大してみたが、不鮮明でほとんど使用できなかったことは大変残念である。

以上

〔取材新聞名〕明治43・44・45年版

- 東京府 時事新報，報知新聞，読売新聞，国民新聞，東京日日新聞，東京朝日新聞，やまと新聞。
- 栃木県 下野新聞。
- 山梨県 山梨日日新聞。
- 神奈川県 横浜貿易新報。
- 静岡県 静岡民友新聞。
- 愛知県 名古屋新聞，新愛知，扶桑新聞，新潮報（豊橋）。
- 三重県 伊勢新聞。
- 京都府 京都日出新聞。
- 大阪府 大阪毎日新聞，大阪朝日新聞，大阪時事新報。
- 兵庫県 神戸新聞，神戸又新日報。
- 岡山県 山陽新報
- 広島県 芸備日日新聞，中国新聞。
- 山口県 防長新聞，馬関毎日新聞。
- 島根県 山陰新聞，松陽新報。
- 鳥取県 因伯時報，鳥取新報。
- 長崎県 九州日の出新聞。

〔追録〕 写真一12



山口勝蔵周遊自動車，富士山麓にて  
国民新聞，明治44年7月29日